

Title	台湾原住民文学のパイオニア：トパス・ダナピマの世界
Sub Title	Topasu Danapima : a pioneer of Aborigine literatura in Taiwan
Author	中野, 裕也(Nakano, Hiroya)
Publisher	慶應義塾大学藝文学会
Publication year	1993
Jtitle	藝文研究 (The geibun-kenkyu : journal of arts and letters). Vol.62, (1993. 2) ,p.132- 151
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00072643-00620001-0132

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

台湾原住民文学のパイオニア

——トパス・ダナピマの世界——

中野裕也

一、はじめに

一九八〇年代の台湾文学界を概観すると、そこにはそれ以前には見られなかった異変とも言うべき出来事が生じていたことに気付かされる。それは元来は文字を持たなかったマレー・ポリネシア系の台湾原住民民族⁽¹⁾による、中国語を介した文学の創始である。

彼らの創作領域は、その後小説や詩、さらには散文と多岐にわたり、今日までに原住民文学という独自のジャンルを確立するまでに至っている。

この台湾の原住民文学については、日本でもこれまでに何度か紹介されてきた。しかしそのほとんどは、単に台湾の原住民民族に対する物珍しさから、彼らの文学を取り上げていただけのように思われる。このため原住民文学の本質であるはずの、原住民作家達が一体何を訴えようとしているのかという点に関しては、これまであまり顧みられることがな

かったようだ。

そこで本稿では、予め原住民文学が誕生してきた背景を踏まえた上で、原住民作家の草分けであるトパス・ダナビマ（漢名：田雅各⁽²⁾）の著述活動を概観していくことにより、彼が作品の中で訴えようとした事柄について考えてみたい。そしてこのような考察を通じて、初期の台湾原住民文学が持つ意味合いについても探っていくことにする。

台湾の原住民民族に関しては、私は一九九〇年三月より、二年四カ月間にわたって台湾南部の大学で日本語の教鞭を執る傍ら、ほとんど週末毎に山間部に点在する彼らの村落（主にルカイ、パイワン、ブヌン各部族の村落）を訪ね、寝食を共にしながら原住民民族を取り巻く様々な状況について彼らと語り合った経験を持つ。

また本稿で取り上げるところのトパス・ダナビマについても、一九九二年三月七日に花蓮に直接彼を訪ね、その著述活動に関して長時間にわたるインタビューを行った。

本稿では以上のような私の体験、及びトパス・ダナビマや彼の周囲の人々へのインタビュー等を踏まえた上で、以下の論を推し進めていくことにする。

二、台湾原住民民族をとりまく状況

一九七〇年代末から八〇年代中頃にかけて、台湾では多数の原住民民族を巻き込んだ不慮の労働災害が多発した。これらの労働災害とは、主に遠洋漁船の沈没や国外での拿捕、都市の建築現場での事故や鉱山災害等であり、改めて原住民が旧来の居住地域を離れて漢族社会に流入し、危険な労働に従事している実態を明らかにした。

台湾原住民の多くは、かつては台湾中央山脈一帯や東部の平野部等に居住し、狩猟と焼畑による原始的な自給自足

の生活を営んでいた。しかし日本による台湾の植民地支配以降は、逐次日本側の統治し易い場所へと移住させられ、次第に稲作を中心とした農耕型の社会へと転化させられていった。そして国民党による台湾光復後、特に一九六〇年代以降は、台湾の経済発展に伴い、原住民族も徐々に漢族の経済圏の中に組み込まれていった。

このような経過を経て、やがて一部の原住民達は、それまで居住していた山間僻地での収入の安定しない農業を嫌い、次第に平野部、もしくは都市部の漢族社会に流入し始める。その数は一九六一年にはわずかに二〇〇人余りに過ぎなかったものが、一九八三年には約八三、〇〇〇人にも達し、原住民族全体のおよそ四分の一を占めるまでになった。

しかし原住民族は、もともと漢族とは異なった文化背景を持ち、母語や社会通念を異にしていた。このため彼らの漢族社会への適応には、困難が伴った。また漢族社会には以前から原住民族に対する根深い偏見と差別も存在していたため、彼らが漢族社会で十分な労働条件を備えた仕事を得ることは非常に難しかった。

その結果、これら移住した原住民の大多数が、危険と隣合わせの何の保障もない低賃金労働へと追いやられ、台湾社会の最底辺層を形成していった。さらに経済的に逼迫した家庭からは、その子女が人身売買の業者へと売り渡されるようになり、学齢期の児童が労働に従事したり、多数の少女達が風俗産業へと身を落とすといった問題も生じた。

こうして山間部の原住民族の村落では、一家を支える働き手や若者の多くが平野部へと流失していったために急速な過疎化が進み、次第に独自の伝統文化や社会秩序が失われ、ひいては個々の家庭生活すら崩壊していったのである。

このように厳しい状況におかれた原住民族ではあったが、一方では漢族社会に流入した人々の中から、大学等の高等教育を受ける若者達も輩出されるようになっていった。つまり原住民族社会と漢族社会双方の異なった価値観を合わせ持つ、原住民知識青年達の誕生である。

一九八三年。こうして誕生した原住民知識青年の一人が、在籍していた大学の文学賞に応募するために、恐らくは台湾原住民族にとって有史以来初めての中国語による小説を書き上げた。この学生がすなわちトパス・ダナピマであり、この時に著された彼の処女作「拓拔斯・塔瑪匹瑪」は、後に原住民文学として認知された最初の作品となるのである。

三、トパス・ダナピマの著述活動への契機

トパス・ダナピマ（以下トパスと呼ぶ。）は、一九六〇年に南投県信義郷人和村に生まれたブヌン族の青年である。彼は一九七八年に高雄医学院に入学後、同大学の社團の一つである「阿米巴詩社」に所属し、思いつくままに詩作に興じていた。やがて彼の周囲には原住民の学生達が集うようになり、酒を酌み交わしながら山での生活や原住民の行く末等について語り合うようになった。

トパスによれば、彼らは時には原住民全体の悲惨な境遇に思い巡らし、酒の勢いも手伝って号泣することもあったという。しかし一夜明けてみれば、当然のことながら周囲の状況は何も変わっておらず、彼らの嘆きも誰に伝わることもない。トパスはやがてこのようなことの繰り返しでは駄目だと感じるようになっていった。

そこで彼は思いの丈を処女作「拓拔斯・塔瑪匹瑪」にまとめ上げ、学内に設けられた南杏文学賞に応募したのである。この処女作「拓拔斯・塔瑪匹瑪」は、トパス自身の民族名の漢字音訳をもって題名としていることからわかるように、あたかもトパスの私小説的な趣の作品である。

トパスはこの作品で、主人公の医大生拓拔斯が山村に帰省する様子を描きながら、漢族社会では見ることのできないブヌン族特有の生活様式や思考方法、さらにはこの時期にトパスが認識していたいくつかの原住民問題を、道中のト

ラックに乗り合わせた村人達との対話を通じて表現している。

しかしこの作品は文学賞の選考の段階ではトパスの意気込みにも関わらず、次点に選ばれたにすぎなかった。ところがこの文学賞に応募したことがきっかけとなって、この作品は幸運にも作家呉錦発の目にとまったのである。⁽³⁾

呉錦発は友人の勧めでトパスの処女作を一読すると、「これこそ真の台湾文学だ。」と絶賛し、自らが手懸けていた『台湾時報』紙副刊に掲載した。そしてこれが契機となって、この作品は一九八三年の雅爾版「年度小説選」と前衛版「台湾小説選」に入選し、台湾における原住民文学の誕生として文壇の耳目を集めることとなったのである。

四、トパス・ダナピマの著述活動を支えた要因

こうして始まったトパスの著述活動には、これ以後二つの要素が大きく介在していく。それは前述した呉錦発の支援と、後にトパスが加わることになる原住民権利促進運動の勃興である。これらはいずれもそれ以後のトパスの著作に深い影響を及ぼすことになる。

まず前者の呉錦発の支援についてだが、それは呉錦発自らがトパスを訪ね、交友関係を結んだことによって始まる。そして呉錦発はトパスを鼓舞して作品の著述を促す一方で、トパスが書き上げた作品を自からのつてを辿って次々と新聞や雑誌等で発表していった。

このような呉錦発の助力を受けて、トパスは一九八四年から八七年にかけて、後にその著書『最後の狩人』⁽⁴⁾にまとめられる一連の作品を発表することができたのである。

この時期の呉錦発についてトパスに感想を求めたところ、彼は呉錦発はあたかも「導師（指導教官）」のような存在で

あったと語ってくれた。

トパスによれば、呉錦発は原住民を同じ仲間だとして受け入れたうえで、トパスの著述活動を励ますと同時に、トパスに様々な助言を与えた。特に作品の中に漢族には理解しづらいブヌン族特有の思考方法や表現等があると、事細かく指摘してくれたという。

このようにしてトパスは、文壇において次第にその存在を認められていくのだが、それを支えた呉錦発自身も、他の原住民作家の発掘や支援に精力的に取り組むようになる。⁽⁵⁾

現在、台湾において原住民文学というジャンルが確立され、何人かの原住民作家達が活躍している背景には、実はこのような呉錦発の彼らに対する支援も深く関与しているのである。

次にトパスの著述活動に影響を与えたもう一つの要素である、原住民権利促進運動へと目を移してみよう。この運動が勃興する契機となったのは、実は二、の冒頭の所でも述べた原住民を巻き込んだ一連の労働災害であった。

こうした事故が度重なるうちに、一部の原住民知識青年達は、このままでは原住民が滅亡してしまうのではないかとという危機感を抱くようになった。そして彼らは単に危機感を抱くだけではなく、原住民族を危機に陥れているさまざまな社会問題に対しても関心を抱くようになっていった。

また当時の台湾では、既にある「民進党」へと発展する「党外」派の政治運動が活発化しており、それまで台湾社会に存在していた言論のタブーも徐々に破られつつあった。

こうした意識の高まりを背景として、一九八三年五月に台湾大学の原住民学生のグループが、『高山青』と名付けた地下出版物を刊行し、原住民の民族意識の喚起と各部族の団結を訴え始めたのである。

当初、彼らの訴えは台北から遠く離れた高雄のトパスの耳にまでは届かなかった。しかしこの『高山青』創刊の際、中心となっていたタイヤル族の青年が徴兵で高雄に配属されたことにより、トパスと『高山青』グループの間に交流が生ずるようになる。

『高山青』の存在を知ったトパスは、彼等の活動について高く評価する。それは一九八四年七月一八日の『民衆日報』紙副刊に掲載されたトパスの評論、「山地知青的角色與影響」からも伺い知ることができる。

その中でトパスは、原住民知識青年の積極的な活動として『高山青』を例に引き、「彼らは勇敢にも社会世論の先頭に立ち、国や社会全体に対して、この社会には山地同胞（原住民）も存在していることをなおざりにしないよう呼び掛けている。」と述べている。

こうして始まったトパスと彼らとの交流は、その後活発になり、トパス自身の原住民問題に対する認識も拡充されていく。そしてトパスは次第に原住民権利促進運動へと傾倒していった。

原住民権利促進運動は、『高山青』の主張を受けて「少数民族委員会」が設立したことによって勃興し、一九八四年一月には両団体の構成員が母体となって「台湾原住民権利促進委員会」が結成されたことで本格化する。

そしてこの「台湾原住民権利促進委員会」（以下「原権会」と称す。）の結成の際には、二四人の委員の一人としてトパスも加わっていたのである。

こうしてトパスは、一方では呉錦発の支援を受けて作品を発表する傍ら、他方ではこのような原住民権利促進運動に加わって著述活動を行なうという独特なポジションを得たのである。このためこれ以後のトパスの作品には、この運動との結びつきを伺わせる部分が数多く見受けられるようになる。

五、トパス・ダナピマの作品と原住民人權促進運動との関連

それでは原住民權利促進運動はトパスの作品とどのように結びついていたのであろうか。次にその点について考えてみたい。

トパスの作品では、そのストーリーの展開に折り混せて原住民問題が様々な形をとって語られていくのであるが、中でもトパスがしばしば取り上げた問題に原住民の土地使用にまつわるものがある。

トパスは「原権会」に加わった翌年に、後に彼の代表作となる小説「最後の狩人」⁽⁷⁾を發表している。

この作品では主人公の比雅日は狩人を自負しており、彼は山中で苦勞した挙げ句、山羌⁽⁸⁾を仕留める。しかし彼は村に戻る途中で、警官に密猟と自然破壊の罪で逮捕され、見逃してもらうために賄賂として獲物を差し出さざるをえなくなる。この時の比雅日の鬱憤は、処女作「拓拔斯・塔瑪匹瑪」に登場する、同じく狩人の烏瑪斯の口を借りて晴らされている。

「林務局。拓拔斯が言ったあの役所だが、あいつ等こそ動物の住みかを壊し続けている。中略。……そのうえで狩人が乱獲したから自然が破壊されたなどと言つてのけるんだ。」

つまり両作品を通じてトパスが訴えようとしたのは、原住民族が先祖伝来の土地で伝統に則つて狩りをしようにも、漢族によって自然保護を名目に禁じられている現実と、その漢族自身が一方では自然を破壊しつつあることに対する怒りである。

先祖伝来の土地で原住民達が禁じられているのは、何も狩猟だけに止まらない。

同じく処女作「拓拔斯・塔瑪匹瑪」に登場する老人の比喩は、孫の結婚祝いにベッドを作ってやろうと、漢族が足を踏み入れたこともない深い森に入って樺を伐り出してくる。しかしこの件がもとで、ある日突然町の裁判所から呼び出しを受け、訳もわからぬうちに盗伐の罪で有罪にされてしまう。

ここで不満を訴えるのは、やはり前出の烏瑪斯である。彼は国有財産の意味を説明しようとする主人公の拓拔斯に向かって怒鳴りつける・

「おい大学生。いい加減なことを言うもんじゃないぞ。あの国語を話す奴らがここに来る前から、ああいう木はこんなに大きかったんだ。中略……。ご先祖が木を伐って家を建てたり、家具を作ったりしたも、神様は一度だって怒ったりしなかったんだ。ディーアンが神様の物を持ち出したからって、林務局は一体何に基づいて、ディーアンに命令したり、罰したり、牢屋に入れたりできるって言うんだ。」

こうした本来は原住民が所有していたはずの土地の問題について、トパスは「原権会」に加わってから発表した作品の中で度々論及している。

作品「懺悔的死」では酔った老人たちの口を借りて、本来原住民の村落であった土地が、観光開発を目的とした漢族の人々に非合法に買い取られ、今では旧来の村に住むのは三家族だけになってしまったと訴えている。また作品「撕裂的女児」では、葡萄栽培の失敗がもとで、原住民の農地が借金のかたに漢族の農民によって奪われ、挙げ句の果てには原住民がその農民の下で働かねばなくなる様を描いている。

こうしたトパスが作品を通じて訴えてきた土地使用の問題とは、突き詰めて考えてみると、山地保留地の問題として捉えなおすことができる。

この山地保留地とは、原住民の生計と山地行政を推し進めるために定められた国有地⁽⁹⁾のことで、この土地に限り原住民は無償で使用できることになっている。しかし実際には、山地保留地は原住民が先祖伝来の土地だと信じてきた台湾全土の山地行政区域のわずか一五％にすぎない。そして残りの八五％の土地は国有林として林務局の管轄下におかれ、これまで原住民は使用することさえ禁じられてきたのだ。

さらにこのわずかな山地保留地さえも、一九七六年に農地等の所有権が原住民の手に移されたのに伴い、漢族の非法な手段で次々と原住民から取り上げられていったのである。

何らの財産もなく、農業のみに依拠して生計を立てていた原住民達にとって、このような土地を失う状況は死活問題であった。

トパスが上記の作品の中で描いてきたのは、実はこのように山地保留地に押しこめられ、そのうえ保留地の土地さえ奪われてきた原住民達の悲哀だったのである。

そしてこの山地保留地の問題に関しては、「原権会」によって一九八八年八月から本格的な抗議行動が始められる。

中でも同年八月二五日に台北で行なわれた「還我土地」をスローガンとするデモには、原住民族各部族の代表約二〇〇〇人が参加し、この問題がいかに現住民族全体にとって切実なものであるかを訴えた。そしてこの運動によって、「原権会」は今日までにある程度の国有地を原住民の手に取り戻すことに成功し、運動は今尚継続されているのである。以上はトパスと「原権会」の土地問題に対する認識が一致していたことを示す例であるが、これと同様にトパスが作品を通して訴えた問題で、「原権会」が実際の抗議行動を行なった例は他にもいくつか見られる。

その中でも双方の結びつきを示す最も顕著な例としては「呉鳳伝説の教育の場からの撤廃運動」とトパスの作品「馬

難明白了」が挙げられる。

「原権会」がこの運動を通じて撤廃を主張した呉鳳伝説とは、小学校の「生活と倫理」科目の教科書に掲載されていたもので、日本統治時代の教科書の内容が国民党による光復後もそのまま転用されたものである⁽¹⁰⁾。

この伝説は、阿里山一帯に居住する原住民のツォウ族が他の部族とは異なり、早くから餓首の風習を廃していたことに端を発するもので、伝説では清代にこの一帯の通事を務めていた漢族の呉鳳という人物が、自らを犠牲にすることによってツォウ族の風習を改めさせたということになっている。

「原権会」の撤廃運動の過程では、この伝説の歴史的信憑性に関して多くの疑問が提出されたが、それ以上に問題視されたのは、この伝説が教育の場で流布されたことによって、原住民族に対する差別が助長されてきた点である。

つまりこの伝説の存在は、原住民族の側から見れば、原住民族とは首狩りをする野蛮で遅れた奴らなのだという漢族側の偏見を固定化し続けてきたわけである。

「原権会」はこうした偏見を打破するために、一九八五年九月の抗議行動を皮切りに、教科書からの伝説の削減と呉鳳を賛美する地名や銅像の撤廃等を求めて粘り強い運動を展開し、一九八九年までにはいずれの要求も実現するという成果を収めている。

以上が「呉鳳伝説の撤廃運動」のあらましだが、この運動とトパスの作品の間には以下のような関連が見られる。先に示した作品「馬難明白了」であるが、そのストーリーは次の通りである。

主人公の馬難は都市の小学校に通う原住民の少年で、その日彼が受けた授業は呉鳳に関するものだった。教師はかつての原住民は、中国の倫理の薫陶を受けていなかったためにこのような野蛮な行爲を行なったのだと説明し、それを

聞いた馬難は強いショックを受ける。そこへ追い打ちをかけるように閩南人の級友が原住民は首狩り族だとはやしたてる。馬難は泣きながら家に戻ると、医師である父親に向かって、なぜ自分が原住民であるのか、自分の祖先はそれほどまでに残忍であったのかと疑問を投げ掛ける。父親は馬難をなだめると、祖先がいかに優秀な民族であったかについて語り、呉鳳についても、このような伝説を重視したところで、双方の民族の間に混乱と憎しみを生むだけだと結論付ける。それを聞いた馬難は、次第に自らが原住民であることの自信を回復していくのだった。

この作品についてトパスに尋ねたところ、彼はこの作品は親属の実体験に基づいて創作したのだと語ってくれた。しかしストーリーからもわかるとおり、この作品は一少年の心情にスポットを当てることにより、これまで呉鳳伝説によって自尊心を傷つけられてきた、原住民族全体のやるせない気持ちを代弁しているのである。その上でトパスは父親の言葉の中に「原権会」の主張を重ね合わせる。つまりこの作品によってトパスは「原権会」をその代表として、原住民族の人々がどれほど呉鳳伝説の撤廃を望んでいるのかを表現しているのである。

さらにこの作品が書き上げられたのは「原権会」の最初の抗議行動の直前であり、これも単なる偶然によるものではない。なぜなら撤廃運動の拡大にともない、この作品の主人公馬難は、原住民の心情を代弁している具体例として、様々な場で引き合いに出されたからである。従ってこの作品はまさに「原権会」の伝説撤廃運動を支援するために著されたといえるのである。

このようにトパスは、この作品では原住民権利促進運動におけるオピニオンリーダー的な役割を果たしたわけであるが、実はこのような原住民文学の作品と原住民権利促進運動が密接な関連を持つといった傾向は、トパスだけに止まらない。八〇年代中頃から次々と創作を開始した他の原住民作家達についても、同様のことが言えるのである。

六、原住民文学と原住民権利促進運動

一九八四年から本格的に作品を発表し始めたパイワン族の盲目の詩人、モナーナン・マラヤフォス（漢名：曾舜旺。以下モナーナンと呼ぶ。）は、トパス以上に原住民権利促進運動と深いつながりを持つ。

モナーナンはこれまで、職業紹介所に騙されて奴隷同様に労働市場に売られ、社会の底辺をさまよううちに失明するといった苦難に満ちた人生を送ってきた。また彼の妹は一四歳で売春婦として売られ、後に彼自身に救けだされている。こうした経験を持つモナーナンだけに、彼の原住民権利促進運動への関わり方は積極的である。

モナーナンも「原権会」の設立当初から委員として参加している。そして不自由な体を推して「原権会」が発動したデモに参加するとともに、自らの詩を「原権会」発行の定期刊行物『原住民』に提供してきた。このため彼の詩には、このような抗議活動をせざるをえない原住民の心情を代弁したものが多く。

例えば彼の詩「来自地底的控訴」は、南投県のブヌン族の墓が心ない漢族の人々に暴かれた事件に対し、抗議集会の前日にビラに刷り込むために急遽作られたものである。

この他にもモナーナンは女子の「人身売買」に反対するデモや、「湯英伸」事件⁽¹⁾に対する抗議活動等が行われる度に、原住民の熱い思いを詩に託している。

さらに原住民文学の代表的な散文作家、タイヤル族のワリス・ヨーガン（漢名：呉俊傑、ペンネーム柳翔）に至っては、その著述活動は原住民権利促進運動そのものであるとさえいえる。

彼は小学校の教員を務める傍ら、一九八七年頃から台湾の革新系の新聞紙上で、度々原住民問題について論じてきた。

そして一九八九年に創刊された「原権会」の隔月紙『原報』では編集委員を務め、「原権会」の立場から盛んに原住民問題を取り上げている。

彼は自らも『狩人文化』という月刊誌を発行しており、九一年七月にはタイヤル語と中国語の対照形式を用いた小説集『泰雅脚踪』⁽¹²⁾を出版するなどして、原住民語の普及と原住民文化運動の実践にも取り組んでいる。

以上の原住民作家の例からもわかるように、彼らの著述活動はそれぞれ異なった方法ながら、原住民権利促進運動と何らかの関わりを持ち、一部の著作は同運動を支援するために創作されているのである。

この点について端的に語っているのはモナーナンである。彼は詩を書くことの意義を問われて、「詩とは私にとって
⁽¹³⁾は人々を呼び覚まして運動に参加させる道具なのだ。」と語っている。

従ってこれらの作家によって勃興した初期の、もしくは八〇年代の台湾原住民文学を論ずる際には、単に彼らの作品を表面的に捉えて、台湾の原住民が独自の世界を書き表わしたなどというセンセメンタルな文学論だけに留めておくわけにはいかない。

彼等の作品を本質的に理解するためには、どうしても漢族に抑圧されてきた原住民を取り巻くさまざまな状況を把握したうえで、原住民の漢族社会に対する権利促進運動という民族運動的な要素を加味することが必要となるのである。

七、トパス・ダナピマの作品のオリジナリティー

これまで見てきたように原住民作家達の作品は、それぞれが原住民権利促進運動と関わりを持つという共通点を有す

るわけだが、それではそうした原住民作家達の中であって、トパスの作品が持つオリジナリティーとはどのようなものであったのだろうか。

まず第一に挙げられるのは、彼の作品が原住民社会にとっては外界とも言える漢族社会との接点を軸にして語られていく点である。

そして原住民の側を代表するのは、常にトパスが属するブヌ族の人々である。

トパスは創作の段階では、いつもブヌ族独自の思考方法や価値観から出発し、漢族との接触による困惑や軋轢を表現することによって、両民族の差異を浮き彫りにしているとする。

それは具体的には作品「最後の巫婆」で見られるようなブヌ族の祈禱師と閩南人の男の金銭に対する執着心の差や、処女作「拓拔斯・塔瑪匹瑪」に見られるような学歴偏重の漢族社会に対し、今だに学校教育の価値を掴み切れないでいる村人達の独特な思考方法等となって現われる。

そしてこうした両民族の価値観の差異を提示することによって導き出される結論とは、漢族に対しては明らかに異なる価値観を持つ原住民への理解を求めるものであり、原住民族に対しては漢族社会をより理解することにより、自らの社会を改善していくべきであるといった提言である。

このためトパスの作品では、一方的に漢族の側を批判するばかりではない。時には原住民族の側を戒める意味での批判もなされるのである。

例えばいくつかの作品の中に見られる原住民の過度の飲酒の習慣に対する冷ややかな眼差しや、安易に山地を捨てて漢族社会に流入しようとする若者達への警鐘等がそれである。

これらは別の見方をすれば、トパスが今日まで山地と平地の両方の価値観を持ち、その狭間で揺れてきたことをも表している。

トパスは九歳で両親の元を離れ、教育を受けるために山間部の村を離れて以来、これまでずっと一人で漢族社会の中で生きてきた。そして村で受けた教育と漢族社会の行動様式のあまりの違いに戸惑い続けてきた。さらに高等教育を受けた今となっては、村に戻っても、もはや村人たちの思考に完全に同調することはできなくなっている。

こうしたジレンマを抱えるトパスであったからこそ、作品の中で二つの民族の差異をこれほどまでに表現できたのだと言えるだろう。

トパスの作品に見られるオリジナリティーとしてさらに挙げられるのは、彼がこうした両民族間の差異を訴える他に、既に消滅してしまったかつてのブヌン族の伝統文化と、変わりつつある現代のブヌン族の生活を対比させながら紹介していく点である。

トパスはそのためにも今尚伝統文化に固執する老人達と、そこから脱却はしたものの、新たな方向性を見いだせずには漢族に同化されつつある若者達を常に作品の中に盛り込んでいる。そして異なった世代間の葛藤の中に、変貌しつつある原住民の本物の姿を表現しようとする。

このようにトパスの作品のオリジナリティーについて考えてみると、そこから浮かび上がってくるのは、現代に生きる原住民とは一体どういう人々なのか、その実像を読者に理解させようとするトパスの創作におけるひたむきな姿勢である。

トパスは山を下りて以来、漢族社会の価値観に違和感を覚える一方で、漢族の人々が余りに原住民社会の実状を知ら

ずに原住民を差別することに驚き、失望してきた。

トパスはそうしたもどかしさの中から、中国語による小説を著すことで原住民の実態を伝えていくことに思い至る。そして彼はその必要性の中に自らが小説を創作していくことの意義を見いだしていたのだ。

トパスは言う。「とにかく漢族に自分達の置かれた状況を知らしめたかった。そのために作品を書いたのだ。」

「私が当初から言いたかったのは文化、自己の民族の保存、宣揚（広く知ってもらうこと）だった。」

インタビュの際に彼が語ってくれたこれらの言葉は、いずれも彼を創作へと駆り立てた心情を物語っている。そしてトパスは単に原住民問題を訴えるだけにとどまらず、漢族に原住民の本当の姿を理解させることで、相互理解を深め、原住民問題を少しでも解決の方向へ導いていこうとしたのである。

このような単に漢族に向かって原住民の主張を声高に叫ぶだけでなく、身近な所から民族間の相互理解を追求しようとする姿勢こそが、実は彼のオリジナリティーであり、彼の作品の本質だったのではないだろうか。

八、その後のトパスの著述活動

高雄医学院在学中から作品を発表していたトパスは、卒業して兵役に服してからも作品を発表し続ける。しかし彼の作品には、前述したように「原権会」との関連という多分に政治的な側面があったため、彼は時には警察総司令部に呼び出され、反体制分子として取り調べを受けることもあったという。

トパスは兵役を終えると、一九八七年七月から九一年三月までヤミ族の住む離島、蘭嶼島の衛生所に医師として勤務する。これは同じ原住民族の医療活動のために奉職したいという彼の願いに基づくもので、この件がもとで彼は後に

「台湾のシュバイツァー」と呼ばれることになる。

トパスの蘭嶼島での生活については、彼の綴った日記に基づくエッセイ、「蘭嶼行医記」に詳しい。⁽¹⁴⁾

トパスがこのエッセイの中で特に強調したのは、蘭嶼島の衛生所に代表されるヤミ族に対する医療体制のずさんさであった。このためトパスは、この問題の改善のために政府との折衝に全力を傾けるようになり、次第に著述活動から遠ざかるようになる。

同時にトパスは「原権会」とも次第に疎遠になっていく。それは政府に対して次第にラジカルな主張を繰り返すようになった「原権会」と、相互理解に基づいた身近な問題からの解決というトパスの穏健な主張が、うまく噛み合わなくなっていたからに他ならない。⁽¹⁵⁾

トパスは一九九一年三月に蘭嶼島の医師の待遇改善が完了したのを見届けたうえで、花蓮の省立病院に転任する。

九二年三月に私が彼を訪ねたのもこの病院であり、そこで彼は現時点での著述活動に関する私の質問に答えて、現在は病院での勤務が多忙ゆえ創作に専念することができず、いずれ山に戻ってゆっくりと取り組みたいと語ってくれた。

トパスは現在、次の任地としてブヌン族の居住する高雄県の山間部の村落を希望している。もしこの希望が実現すれば、彼は処女作「拓拔斯・塔瑪匹瑪」の中で主人公の拓拔斯に語らせた、将来は自らの村で服務したいという希望にまた一歩近付くことになるだろう。

九、終わりに

「原権会」の活動によっていくつかの問題が解決されたとはいえ、台湾原住民族は今も尚様々な問題に直面している。

そして今後このような問題を解決していかねばならないのは、やはりトパスを含めた原住民族の若者達である。

私は現在の台湾社会を見る限り、トパスが目指した原住民族と漢族間が相互理解を深めていくという状況からは、まだまだ程遠いように感ずる。それはトパスがこれまでいくつかの文学賞を獲得したとはいえ、漢族社会では原住民族学それ自体がまだ一般にはあまり知られていないことにも起因しよう。

しかし私は山間部の村を訪ねる度に、異なった村々の若者達の口から、幾度となくトパスの名を聞くことができた。トパスは小説を著すことで、少なくとも彼ら若者達に原住民族でもやればできるのだという自信を与えることはできたようだ。

原住民族文学はこれからも原住民族の若者達にとっては、原住民族問題に立ち向かっていくうえでの指針として機能していくことだろう。

私は今後、原住民族文学がより一層盛んになり、漢族の人々が彼らの訴えに少しでも耳を傾け、台湾社会全体がトパスの描いた理想に少しでも近付いていくことを期待するものである。

注

(1) 漢族が台湾に移り住む以前から台湾に先住していた民族を指す。日本語では先住民族とすべきかも知れないが、現在彼等自身が「台湾原住民族」という呼称を用いる運動を推進しているため、本稿では敢えて「台湾原住民族」と呼ぶことにする。

(2) 台湾の原住民族は公的には民族名の使用が許されておらず、漢名を用いている。しかし部族の中では本来の民族名で呼び合うのが普通である。

ブヌン族は氏族社会であり、「トパス」は個人名を、「ダナビマ」は彼が属する中氏族名を表している。本人によれば彼はダ

ナビマ氏の中でもカビナル氏に属するという。

- (3) 吳錦発はこの当時、既に『故旧』、『静黙的河川』等の自身の短篇小説選等によって時報文学賞を受賞していた若手作家で、この時には『台湾時報』紙、後には『民衆日報』紙の文芸欄の編集を担当している。また彼は以前から原住民族の文化に対しても深い造詣を寄せていた。

- (4) 晨星出版社、一九八七年九月。

- (5) その成果は以下の二冊にまとめられている。

吳錦発編『非情的山林—台湾山地小説選』晨星出版社、一九八七年一月。

- (6) 吳錦発編『願嫁山地郎—台湾山地散文選』晨星出版社、一九八九年三月。

- (7) 後に「原住民族利促進委員会」の委員長を務めるイファン・ヨーガンを指す。

- (8) トパスは同作品で一九八六年に吳濁流文学賞を受賞している。

尖った角を持つ子鹿ほどの大きさの動物で、肉は食用に、毛皮も原住民族の民族衣装の帽子等の材料とされる。若林正丈編『台湾百科』(大修館書店、一九九〇年七月)のトパスに関する説明の中で、大驚と訳して紹介されているのは明らかに誤りである。

- (9) 民國三十七年に公布された「台湾省各県山地保留地管理弁法」第二条。

- (10) 一九一三年から台湾で使用された小学読本巻八に「吳鳳伝」として採用されたものがその始まりであるとされる。

- (11) 一九八六年一月に職業紹介所に騙された原住民の少年湯英伸が犯した殺人事件。「原権会」を中心に死刑の撤廃を求めて運動が繰り広げられた。

- (12) 晨星出版社、一九九一年七月。

- (13) 「盲詩人莫那能兄弟」「人間」雑誌、一九八七年一月

- (14) 吳錦発編『願嫁山地郎—台湾山地散文選』晨星出版社、一九八九年三月。

この他に、「蘭嶼医生田雅各」(『人間』雑誌、一九八八年四月)でもトパスの医療活動が詳しく紹介されている。

- (15) 「原権会」は今日では一五年以内に台湾に原住民族自治区を建設するよう主張するまでになっている。「十五年内建立自治区—原住民的未來端視自治成效」『原報』、一九九二年四月。